

『歴史』本編は九つの巻に分かれており、岩波文庫では三分冊である。主軸となるのはアジアとヨーロッパ、すなわちペルシアとギリシアの抗争である。一応、神話から筆を起しているが、「過去の事実」としての「歴史」の記述は前7世紀前半に始まる。

より具体的には、キュロス(在位前550-)、カンビュセス(在位前529頃-)、ダレイオス(在位前558頃-)、クセルクセス(在位前486-465)の4代にわたるペルシア王の対ギリシア戦争を中心としている。一番新しい事件として前431年に始まったペロポネソス戦争(アテナ対スパルタ)に言及しているので、『歴史』の完成もその頃と見られる。

ヘロドトスの生没年は不詳だが、ペルシア戦争(前492-444)の前半に幼少期を送ったのは確かであり、したがってマラトンの戦い(前490)やサラミス海戦(前480)については体験者から直接聞き取りを行うことができた。

ところで『歴史』は全体にいろいろ錯綜しているというか、例えばペルシアが一つの国(都市)を征服した、という事件を述べるのに、「さて、続いてキュロス(あるいはその後継者たちの誰でも)は 人を征服しようと思いついた。この 人というのは……」と、征服される国の前史、風土習慣を述べてから(風土習慣は後回しになることもある)さらに「キュロスが 人を征服せんと欲したのは、次のような経緯であった。」とその経緯が述べられ、ようやく征服戦争そのものが語られ、その間にもさらに幾つもの余談が挟まれるといった具合である。

というわけで、まずは『歴史』を通読したのだが、「いったい私はいつのどんな出来事について読んでたんだっけ」としばしば混乱させられたのであった。

一方『サラミス』では最初の節(3頁分)で非常に簡潔に、キュロスがペルシア帝国(アケメネス朝)を建てた(前550)ところから、前480年9月、サラミス海戦の直前までが年代順に述べられる。

ここで述べられた内容に、『歴史』のどの記事が該当するかを調べて、初めて『歴史』の各エピソードの関係(繋がり)がどうにか把握できたのであった。つまり、『サラミス』と『歴史』の読み比べは、『サラミス』だけでなく『歴史』の読解にも非常に有効なのである。

なお、私が行ったのはあくまで『サラミス』と『歴史』の読み比べであり、『歴史』以外の文献にはほとんど当たっていない(概説書をいくらか参考にした程度)。したがって、例えば「『サラミス』のこの下りに該当する『歴史』の記事はない」といった具合に、それ以上の元ネタは追究していない(しかも該当記事が本当にはないのではなく、私が見落としている可能性もある)。御了承ください。

とりあえず『サラミス』第1節の記述に対応する『歴史』の記事の概要を挙げる(()内、巻・節の番号)。

- 1 キュロスの誕生から建国、メディアを滅ぼすまで（巻1、107～130節）
『サラミス』でも述べられているとおり、キュロスはメディア王アステュアゲスの娘と被支配民族であるペルシア人カンビュセスの子。祖父の国を征服したのである(前550)。
- 2 キュロスがリュディア（アナトリア西部の非ギリシア人国家）を滅ぼす（巻1、71～91節）
リュディア王クロイソスは、メディア王アステュアゲスの姻戚であるため、それを理由に（あるいは口実に）ペルシア出征して返り討ちにあった(前548)。
- 3 キュロス、リュディアの支配下にあったギリシア人諸都市（アナトリアのエーゲ海東岸のイオニア地方）を征服（巻1、141～169）
- 4 キュロス、バビロニア征服（巻1、181～191節）
前539年。バビロン歴代諸王のうち二人の女王の事績についてが挿入されている（どちらも伝説上の人物らしいが）。この二女王、後段のマッサゲダイ女王トミュリス、そして独裁者アルテミシアなど、ヘロドトスは有能で高貴な女性に好意的である（女性全般には別段好意的ではないが）。
- 5 キュロス、マッサゲダイ親征中に戦死（巻1、201～214節）
- 6 キュロスの子カンビュセスのエジプト征服（巻3、1～16節）
- 7 マゴス僧の謀反とカンビュセスの死（巻3、61～66節）
カンビュセスの悪行とは、肉親や重臣の殺害、またエジプトの聖牛と祭司たちの殺害をはじめとする非支配民族の宗教の蹂躪など（27～38節）。そうした罪の一つに、実の妹たちを娶った（後にその1人を殺害）ことも挙げられている。ヘロドトスは、当時のペルシアは兄弟姉妹同士の婚姻を禁じていたとしている。ゾロアスター教では近親婚は「聖婚」とされているのだが、アケメネス朝ではどうだったんだろ。
- 8 マゴス僧の陰謀を7人の貴人が暴き、その1人ダレイオスが即位（巻3、67～88節）
前521年。『歴史』や他の史料では、マゴス僧はカンビュセスの弟スメルディスが実は生きていたとして偽者を擁立した、ダレイオスはアケメネス朝の傍系だった、とするが、実はやはり本物で、ダレイオスはペルシア王家とは血縁がない、すなわち篡奪者だったという説もある。
- 9 イオニアのギリシア人の反乱と鎮圧（巻5、30節～巻6、32節）
前499～494年のこの反乱には、ペルシアの勢力圏外のギリシア人都市（国家）が多数加勢したため、ダレイオスは反乱鎮圧後、ギリシア圏の征服に乗り出し、それがペルシア戦争へと繋がるのである。
- 10 ヘレスポントス沿岸諸都市の征服。僭主ミルティアデス、アテナイへ逃亡（巻6、33～41節）
- 11 ダレイオス、ギリシア征服のため大軍勢を派遣(巻6、43～45節)

- ペルシア戦争の始まり(前 492 年春)。マケドニアまでは順調だったが、その後は陸海軍とも多大な損害を被ったために引き揚げる。
- 12 ダレイオス、第二回ギリシア遠征軍を派遣。アテナイ領アッティカへ至る(巻 6、94～102 節)
 - 13 マラトンの戦い(巻 6、103～117 節)
前 490 年。マラトンはアテナイの北東 42 キロ。スパルタの援軍は間に合わず、アテナイの 10 人もの指揮官たちはマラトンに到着してから交戦するか否かの議論を始めた。10 で逃亡したミルティアデスが交戦を主張して通り、彼の指揮でペルシア軍を破った。
 - 14 ダレイオスの親征準備、および死(巻 7、1～4 節)
前 486 年。

 - 15 ダレイオスの後継者クセルクス、ギリシア遠征を決定(巻 7、5～19 節)
従兄弟(ダレイオスの妹の子)マルドニオスに唆されたクセルクセスは、一度は遠征に乗り気になるものの、叔父アルタバノスの勧告で取り止めようとする。そこへ夢に神々しい男が現れ、遠征をしないと許さん、と恫喝したのである。
 - 16 ギリシア遠征の準備(巻 7、20～25 節)
丸四年もかけて周到な準備を行う。
 - 17 諸民族から成る遠征軍(陸軍)について(巻 7、60～88 節)
各民族について、軍装を中心に習俗や歴史も簡略に述べている。
 - 18 上記陸軍を率いてクセルクセス、進軍。ヘレスポントス(ダータネルス)海峡に架橋し、ヨーロッパへ渡る(巻 7、26～56 節)
 - 19 諸民族から成る遠征軍(海軍)について(巻 7、89～99 節)
ペルシア艦隊の将の 1 人が、ヘロドトスの故郷ハリカルナッソスの女独裁者アルテミシア(ヘロドトスより 1、2 世代前)である。
 - 20 ペルシア陸海軍の侵攻(巻 7、108～132 節、172～200 節)
22 のギリシア勢の動向とも当然ながら大いに関係しているので、該当記事は重複する。ヘレスポントスを発ってからアッティカに到着するまでに 3 ヶ月を要したという記事は巻 8、51 節。

 - 21 アッティカ地方の地勢
アイガレオス山の頂きからサラミス島まで声が届くのかどうか、『歴史』に記述はないが、この山からクセルクセスは海戦を観戦する(巻 8、90 節)。
 - 22 ペルシア侵攻へのギリシア勢の対応(巻 7、132～195 節)
『サラミス』の主人公、テミストクレスは 143 節に初登場する。弁舌が巧みというかむしろ口八丁手八丁であることが早くも明らかにされている。
 - 23 テルモピュライの戦い(巻 7、201～239)

前 480 年 8 月。サラミス海戦の 1 ヶ月前。同時に行われたアルテミシオン海戦(巻 8、1 ~ 22 節。ペルシア海軍が嵐に遭って弱体化したため勝敗はつかず)については、『サラミス』はここでは言及していない。

24 遠征軍の総数(巻 7、184 ~ 187 節、巻 8、66 節)

巻 7 でテルモピュライ到達当時の総数を 264 万 1610 名としている(補給部隊および非戦闘員は加えず)。そして巻 8 では、テルモピュライおよびアルテミシオンを経た戦力を、新たに降伏したギリシア勢を加えて損失を補うことができた、としている。ヘロドトスは文中にしばしば具体的な数値を挙げているが、多くの場合不正確である。

25 ペルシア軍のさらなる侵攻(巻 8、23 ~ 39 節)

抵抗した上で降伏する町もあれば、進んで降伏する町もあり。

26 アテナイ市民の避難とギリシア艦隊のサラミス集結(巻 8、40 ~ 48 節)

27 アテナイの攻撃(50 ~ 52 節)、ペルシア軍のパレロン港集結(66 節)

大方のアテナイ市民は避難を終えていたが、意思堅固な者もしくは金がなくて避難できなかった者たちはアクロポリスに立て籠もり、頑強に抵抗した。

以下、『歴史』では巻 8、56 ~ 96 節でサラミス海戦が、文庫本にして 26 頁を要して語られる。後日談としてペルシア軍の撤退、プラタイア、ミュカレの戦いが続く(巻 8、97 節 ~ 巻 9、107 節。文庫 101 頁分)。

一方『サラミス』では 275 頁にわたって、サラミス海峡でペルシア海軍を迎え撃たんとするテμισトクレスの画策とギリシア勢各国各人の動向、およびサラミス海戦、残り 2 頁で後日談が語られる。各節(章立てはしていない)はタイトル・番号等を付けられていないので、頁数と最初の語句によって示す。

8 頁 「ペロポネソス半島の沖を、」

巻 7、145 節。ギリシア同盟諸国、ペルシア侵攻の脅威に対し、ケルキュラ、クレタ、そしてシュラクサ(シチリア南東部)へ救援要請の使者を送る。153 ~ 156 節は前日談として、ゲロンがシュラクサの僭主となるまでの経緯。

157 ~ 164 節。ギリシア同盟諸国からの同盟要請に対し、ゲロンは以前、シュラクサがカルタゴと交戦した際、救援要請に応じてくれる国がなかったことを根に持ち、自分を盟主にするなら三段櫂船 200 隻を出してやろうと言う。使節(アテナイ人シュアグロス)は拒絶し、折衝は物別れに終わる。とはいえ、ゲロンもギリシアが負けた時のことが心配だったので、カドモスという人物に友好的な口上を申し含め、50 櫂船 3 隻を付けてデルポイに派遣した。

ゲロンはカドモスに多額の金も持たせた。これはギリシア勢への援助ではなく、戦いの趨勢をよく見極め、ペルシアが勝った場合はこの金をクセルクセスに献じてシュラクサの服従を誓い、ギリシアが勝った場合は金はそのまま持ち帰れ、というのであった。

このカドモスはゲロンの部下ではなく、元はコス島(アナトリア南西部沿岸の小島。ロドス島に近い)の独裁者の跡継ぎだったが、正義感から支配権を放棄し、シケリア(シチリア)へ来島した人物である。ゲロンはカドモスを正義感の強い人物として信頼しており、上の任務を依頼したのであった。

ヘロドトスは、カドモスがゲロンの依頼どおり、ギリシアの勝利後、金を少しも着服することなく持ち帰ったことで、人々からその正義感をいっそう賞賛された、と述べてるんだが、そもそもこういう日和見に加担すること自体どーなんだろう？

167 節。当時ゲロンはカルタゴとの戦いを目前にしており、本当に 50 櫂船 3 隻以上の救援は無理だった、というシチリアのギリシア人自身が伝える説を紹介。

168 節 . シュラクサの勧誘に失敗した使節団は、そのままケルキュラに向かい、同じ口上を述べて同盟を要請した。これに対しケルキュラは、全力を尽くして援助すると答えたが、実際に出したのは 60 隻の小艦隊で、サラミス島より遙か手前のタイナロン岬沖で停泊し、日和見を決め込んだ。これは予定の行動であり、後日ギリシア方に非難された際には、予め用意してあった弁解を用いた。すなわち、季節風に妨げられてそれ以上先に進めなかったものであり、決して怯懦のためではない、と。

ケルキュラはペルシアが圧勝するものと予想しており、その場合のクセルクセスに対する弁解は、自分たちの戦力は決して小さくなく大艦隊を出そうと思えば出せたが、あなたに敵対するつもりはなかったのでこれだけの艦船しか出ませんでした、というものであった。

『サラミス』では、ケルキュラの小艦隊がちょうどタイナロン岬で停泊したところへ、カドモスが 50 櫂船 3 隻で現れる。ギリシア同盟諸国からの救援要請と救援派遣という共通した経緯を確認し合い、さらに互いに対する猜疑を述べ合う。

すなわち、なぜ「三段櫂船 200 隻」でも出すことのできるシュラクサが 50 櫂船 3 隻しか出さなかったのか、なぜケルキュラはタイナロン岬で停泊しているのか。それに対して、それぞれが用意していた弁解を述べ合う。

『歴史』巻 7、163 節でゲロンがカドモスを派遣したのは「デルポイ」となっている。デルポイ沿岸はサラミス島とは地峡を挟んでいるので、デルポイと呼ばれる地域がサラミス一帯をも含んでいるのでない限り、50 櫂船 3 隻は形ばかりの救援ですらなかったことになるが、ともかく『サラミス』ではタイナロン岬で出会ったシュラクサ勢とケルキュラ勢が季節風という「神々の事情」を言い訳に、仲良く日和見を決め込むのであった。

14 頁 「神々の事情が」

サラミス島にギリシア同盟軍が集結するまでの事情が、もう一度ざっと述べられる。ギリシア勢はテルモピュライとアルテミシオンの以前に、テッサリアのテンペを防衛線とし

ていたのだが、そこへマケドニア王アレクサンドロスの使者がやってきてペルシア軍が強大であることを強調し、撤退を勧めた。マケドニアはすでにペルシアに与していたのだが、ギリシア勢は彼をギリシアに好意的な人物であると見て、この勧告に直ちに従ったのであった。という経緯については巻7、173節(『サラミス』ではテンペのギリシア陣営に赴いたのは使者ではなくアレクサンドロス本人)。

ギリシア陸軍がコリントス地峡に撤退し、長大な要塞を築き始めたことは巻8、71～73節。「地峡の部隊は今や祖国の興廃を賭した勝負を争っていることを自覚し、水軍による成功には期待することなく、右のような労役(地峡の要塞化)に服していた」(74節)。

ただしここでも、スパルタ、アルカディア、コリントスなど中心的な地方の住民を除いたギリシア人たちは、「全く無関心であった」。

巻7、169～171節によると、クレタ人は救援要請に対し、デルポイの託宣を理由に拒絶した。クレタの弓兵バットスたちは、国の方針に逆らって参戦したのである。

本土とサラミス島間の海を埋め立てるという案があったかどうかヘロドトスは述べていないが、クセルクセスと遠征軍はアトス半島の付け根を掘って本土から切り離してしまった実績を持つので(巻7、22～24節)、そういう危惧は当然あったと思われる。

26頁 「親愛なるオイバレスへ」

ペルシア本国の水準に比べて、ギリシア全体が非常に貧しかったことは、巻9、82節で述べられている。サラミスの後のプラタイアの戦いで、パルタの指揮官パウサニ阿斯はペルシア総司令官マルドニオスの料理人を食事用の豪華な調度ごと捕らえた。パウサニ阿斯この料理人に命じて、いつもマルドニオスに作っていた料理と同じものを作らせ、同じように食卓をしつらえさせた。そして自分の料理人にいつもの料理を作らせて並べ、二つの食事の差があまりにも激しいことに驚き呆れた。

27頁 「アイガレオス山の」

巻7、208・209節によれば、戦いを前にスパルタ兵が体育の練習をしたり髪に櫛を当てるのは、生死を賭して戦う気構えを示す。

アルゴスがペルシア側に付いた経緯については、巻7、148～152節。理由は諸説あるが、スパルタの専横が多かれ少なかれ原因となっている。スパルタ王クレオメネス(レオニダス王の兄)がアルゴスを蹂躪したことについては巻6、76～83節。クレオメネスは少々常軌を逸したところが生来あったが、晩年に至って完全に狂気に陥った(同75節)。

34 頁 「ニレの樹を並べた林の中で」

何日にもわたって抵抗していたアクロポリスがついに陥落し、脱出した市民たちが追っ手を振り切ってサラミスへ逃亡する。この場面そのものは『歴史』には記されていないが、アクロポリス陥落は巻 8、53 節。同 50 節で議論中の諸将たちに注進に来たアテナイ人とは、『サラミス』のディオクレスに該当か(『歴史』のこの辺りの時系列は少々不明瞭である)。

ギリシア方に付いたスキュタイ人については、『歴史』には記述がない。「スキュタイ式」の痛飲については、巻 6、84 節(ギリシア人は葡萄酒を水で割って飲むが、スキュタイ人は割らずに飲む)。この飲み方を続けたのがスパルタ王クレオメネスの狂気の原因だともされる。したがって、この言い回しはスパルタのもの。

39 頁 「スパルタ人エウリュピアデスは」

そもそもペルシア戦争の、この時期のギリシア勢はどんな状態だったのかというと、まず団結してギリシアの自由(と正義)を守らねばならない、という大義があった。しかしクセルクセスの大軍に対し、すでに多くの国々がそんな大義はあっさり捨てて服従したり日和ったりしていたのは前述のとおりである。

しかも「ギリシアの団結」など、伝説のトロイア戦争を除いて存在した試しはなく、有史以前からギリシア人たちは異国の脅威があろうとなかろうと無関係に互いに攻撃し合い、陥れ合ってきたのだった。例えばこのクセルクセスの侵攻に際しても、北部ギリシアのテッサリアは逸早くペルシアに与すると、長年の仇敵ポキスに使者を送って、銀 50 タラントン寄越せば今までのことは許してやる、と述べた。ポキス人はその要求を蹴ったのであるが、「このような態度をとった理由は、私(ヘロドトス)が推察するところではテッサリア人に対する敵意からという以外に考えようがない。従って、かりにテッサリア人が」ギリシア方に付いていたならば、「ポキス人はペルシア方に加担したであろう」(巻 8、27~31 節)。

仇敵のこの態度にテッサリア人は怒り狂い、ペルシア軍を嚇けてポキスを襲わせたのであった。

要するにギリシア全国各地の有力者たちにとっては、最も大切なのは己の勢力基盤の保全、次いでその独立であった。ギリシア本土の歴史ある国々の場合、面子もあって独立の占める比重が高く、周辺国のようになんまりペルシアに服従することはできなかった。

「ギリシアの団結、自由」は大義というより建前に過ぎなかったが、ギリシア本土の国々に限っては建前は建前でも、自己正当化と相手の非難の材料としては相当に有効だったのである。

アルテミシオン海戦の後、テμισトクレス率いるアテナイ艦隊が、アテナイ市民を避難させたいからひとまずサラミスに寄ってくれ、と海戦に参加した他国の艦隊に要請した(巻

8、40・41 節)。アテナイ艦隊が自国民を避難させている間、スパルタなど他国の艦隊はサラミス沖に停泊していたのだが、そこへアルテミシオン海戦には参加しなかったギリシア勢の艦隊が、なし崩し的に集まってきてしまった(42～48 節)。

集結したギリシア諸将にとっては、すでにアテナイ(アッティカ地方)は放棄されたものであり、最重要課題は残る国土(コリントス地峡を挟んで西のペロポネソス半島の国々(スパルタ、コリントスが中心)をいかに防衛するか、であった。

しかしもちろんアテナイ人たちとしては、アテナイの目と鼻の先であるサラミスにせっかくギリシア史上空前の大艦隊集結となったのだから、このまま決戦に持ち込んでしまいたかった。

しかし他国、特にコリントス地峡を挟んで西のペロポネソス半島の国々(スパルタ、コリントスが中心)は、それではアテナイのために戦うのと同じことになる、と大いに危惧を抱いた。少なくともアテナイの指揮官テミストクレスは、まったくそのつもりではなかったらう。

「彼ら(ペロポネソス諸部隊)は自分たちがサラミスに踏み留まってアテナイ人の国土のために海戦を行わねばならぬこと、しかも戦いに敗れた場合には島内に封鎖され、自国を無防備のまま放置して敵の包囲を受けるであろうと考えて不安を禁じ得なかったのである。」(『歴史』巻8、70 節)

しかし国土が占領されたとはいえ、アテナイの海軍は未だギリシア随一であり(サラミスに集結した艦船のうち、アテナイは180隻、残りは合計198隻だった)、ペロポネソス勢としてはアテナイなど見捨ててしまいたいが、自分たちだけでペルシアに対抗し得る自信は到底なかった。

ペロポネソス以外の国々(そのほとんどがエーゲ海の島嶼)は、ペルシアの脅威により直面していることもあってアテナイに同調していた。

巻8、42 節のサラミス集結から56 節でアクロポリス陥落の報が届くまでの経緯が少々わかりにくいだが、どうやら各国艦隊が集結するまでの間、そしてアクロポリスが攻囲されている間、サラミスの諸将は延々と議論を続けていたようだ。会議で発言権がある者(指揮官)の数だけでいえばペロポネソス勢が圧倒的に有利なはずだが、地峡の撤退に至らなかったのは、アテナイ艦隊の大きさに加え、テミストクレスがあれこれと引き伸ばしを計っていたからに違いない。

サラミスに集結したギリシア勢の内訳と集結までのそれぞれの事情については『歴史』巻8、42～48 節にある。

アイギナはサラミス島の南向かいにある島で、ダレイオスが前 492 年の遠征開始に先立ってギリシア各地に「土と水」を要求した時、アイギナはそれを容れた。すると以前からアイギナと対立していたアテナイはこれをよい口実とし、スパルタ王クレオメネスを唆してアイギナの親ペルシア派の首謀者を逮捕させようとした(巻 6、49～50 節)。

クレオメネスとスパルタのもう一人の王(スパルタは二王制)デマラトスの対立とスパルタの風習その他について、そしてデマラトスの亡命、および後日談については続く 51～72 節。「さて話を元に戻して」デマラトスを追い払ったクレオメネスによる再度の脅迫に、ついにアイギナが屈してペルシアからギリシアへ寝返るのは 73 節(しかしデマラトスを陥れたことが露見してクレオメネスも亡命することになり、そして狂気に陥って悲惨な最期を遂げるのである。74、75 節)。

この時、アイギナから親ペルシア派の首謀者としてスパルタに引き渡された一人が、サラミス海戦に参加したポリュクリトスの父クリオスだった(その後、スパルタからアテナイに引き渡される)。『サラミス』のこの節でアイギナ人の代表として会議に出席し、スパルタを非難しているのがこのポリュクリトスである。

『歴史』では、ポリュクリトスはスパルタよりもアテナイを恨んでいたようだ(そもそもアイギナと長年対立し、スパルタ王クレオメネスを唆したのもアテナイだから)。巻 8、92 では戦闘中に偶々テミストクレスと行き会ったポリュクリトスは、積年の恨みつらみとばかりにこの件でテミストクレスを非難し罵った。これについては『サラミス』では述べられていない。

46 頁 「寛衣をまとった老人が」

アテナイからアクロポリス陥落の報せがもたらされたのは上の議論の最中(50 節)。テミストクレスの師であるムネシピロスの登場は『歴史』ではこの会議の後(57 節)。訳注によると、ムネシピロスとテミストクレスとの関係についてはプルタルコスにある。

アテナイのアクロポリス陥落の報せがもたらされ、サラミスのギリシア勢は大混乱に陥る(巻 8、56 節)。

52 頁 「光を与える太陽が」

アルメニア人の軍装については巻 7、73 節で述べられているが、矢については言及されていない。

58 頁 「テミストクレスは敷布に腰を下ろして」

スパルタ人が寡黙を好み、他国人の口数の多さを嫌うことは、巻 1、152 節、巻 3、46 節などに見られる(「ポリュクラテスによって国を追われたサモス人たちはスパルタに着く

と、要路の役人に接見を許され、窮迫の事情を縷々として述べた。すると役人はそれに答えて、話の始めの部分は忘れてしまったし、後の方は何のことが判らなかった、といった。」)。

巻8、58節。テμισトクレスはスパルタの指揮官エウリュピアデスの許を訪れ、艦隊をコリント地峡まで撤退させれば、ギリシア勢はそのまま四散してしまうであろうから、サラミスに留まるためにもう一度会議を開いて評決を遣り直すよう説き伏せる。テμισトクレスはこの危惧をエウリュピアデスに「あたかも自分の意見であるかのように述べ」でいるが、57節によると、ムネシピロスから言い含められた言葉である。

65頁 「スパルタ人エウリュピアデスは会議開催の報せを」

テμισトクレスが、エウリュピアデスの会議開始の宣言を待たずに意見を述べ始めたので、コリントの指揮官アデイマントスが性急さを咎める(巻8、59節)。

テμισトクレスは先にエウリュピアデスを説き伏せたのとは異なる論法で指揮官の面々を説得に掛かる(60節)。アデイマントスはすでにアテナイが滅んでいることを当てこすり、テμισトクレスは反撃する(61節)。

そして先の決定が覆され、ギリシア海軍はサラミスに留まって戦うことが決定する(62、63節)。

74～89頁 「空が白む頃にはすべての三段櫂船が」～「緋色に染め上げられたスパルタの天幕の一つで」

ギリシア勢が海戦の準備を行っている時、地震が起こる。そこで、神々の加護を請う(63・64節)。

90～106頁 「占い師エウフランティデスは」～「親愛なるオイバレスへ」

ペルシア海軍の出撃準備(70節)。『サラミス』では偵察に出されたディオクレスらの目を通して、その様子が描かれる。偵察のための船を提供するクレイニアスについては、『歴史』ではアルテミシオン海戦に参加して目覚しい働きをしたと述べられているが(後述)、サラミスではどうだったかは言及されていない。註によると前444年に戦死、とのことなのでサラミスにも当然加わっていたであろう。

106頁 「テμισトクレスは袖無し服の姿で」

『サラミス』6頁で言及されたケルソネソスの僭主ミルティアデスは、マラトンの戦いで功績によって母国アテナイで高い名声を得た。それに調子づいてアテナイ国民を説得して多額の軍資金を出させ、パロス島(当時、大変富裕だった)に侵攻した。見事に失敗して散々の体で帰国した彼を告訴したのが、『サラミス』のこの節で言及されているクサンティッポ

スである(巻6、132～136節)。

サラミス海戦とそれに先立つ戦いに於けるクサンティッポスについて、『歴史』の記事はないが、サラミスの後、セストス攻略(前479)までアテナイ海軍の指揮官を務めている。なお、彼の息子は改革者ペリクレス(前494 - 429)。

アルテミシオンの際にテミストクレスが賄賂を用いたのは、巻8、4・5節。テミストクレスの性格を端的に表すエピソードの一つ。

海戦のためギリシア海軍はエウボイア島のアルテミシオンに到達したが、ペルシアの艦隊が予想以上に強大であるのを見て恐慌を来たし、撤退を協議し始めた。これを知ったエウボイアの島民は、せめて女子供を避難させる間だけでも留まってほしい、とギリシア軍に請願することにした。

島民たちはまず、この時も総司令官であったエウリュピアデスに懇願した。しかし彼を説き落とすことができなかつたので、次にアテナイの指揮官テミストクレスを選んだ。

そして謝礼金(要するに賄賂)30 タラントと引き換えに、ギリシア軍がエウボイア全面に踏み留まってペルシア軍と戦う、という約束を取り付けたのである。

テミストクレスはエウリュピアデスに、この30 タラントのうちから「5 タラントを、あたかも自分の懐から出ている金のごとくにして贈り、踏み留まって戦うよう説き落とした。続いてコリントスの指揮官アデイマントスにも同じように、ただし今度は3 タラントを贈って籠絡した。テミストクレスが「残りの金を握っていることは誰も知らず、その金の分け前にあずかった者たちも、その金はこの目的のためにアテナイから出たものとはばかり思っていたのである。」

テミストクレス、碌でもない奴です。

112 頁 「騎兵が一騎」

前述のミルディアスはパロス島侵攻の際に神罰に当たってか脚を怪我し、これが元で帰国後間もなく死亡する。クサンティッポスの告訴によって支払うことになった罰金50 タラントは、『サラミス』のこの節で登場する息子のキモンが代わって返済することになったのだった。

ペルシア海軍がサラミスに向けて出撃したのは70節。この時、キュノスラ岬沖にも艦隊が配置されていたことは76節にある。

118 頁 「クレニアスの船がサラミスの入り江を」

アテナイ艦隊がフェニキア艦隊の正面に陣取るという配置が実行されたことは、巻8、85節にある。

121～182 頁 「スパルタ人エウリュピアデスは」～「日はいよいよ山の端に近づき」

巻 8、74～75 節。サラミスに留まるという前回の会議でのエウリュピアデスの決定に、ペロポネソス勢の非難が集中した。かくしてみたび会議が開かれ、みたび紛糾する。アテナイ人、アイギナ人、メガラ人など、地理的によりペルシアの脅威に直面している人々はサラミスでの防衛を説いたが、テミストクレスは論争に勝ち目がないと悟り、密かに会議を抜け出して裏工作を行う。

『歴史』ではごく簡略に述べられるこの過程を、『サラミス』では詳細に描く。

121 頁 「スパルタ人エウリュピアデスは」

コリントス人アデイマントスがエウリュピアデスを非難し、会議の開催を促す(強制する)。

クセルクセスのギリシア遠征の目的がアテナイ討伐であったことは、巻 7、8 節でクセルクセス自身の宣言として述べられている。なんの咎による討伐かという点、前 499 - 494、ペルシア支配下のイオニア人たちが反乱した際、アテナイが協力を惜しまなかったことに対してである。

同じ宣言の中で、クセルクセスはアテナイだけでなくギリシア全土を征服するつもりであると述べており、138 節ではヘロドトスもアテナイ討伐は口実に過ぎないとしている。

125 頁 「エウリュピアデスは会議開催の報せを放って」

テミストクレスは会議で前回の決議が覆されることを予測し、会議が始まるより先に裏工作を開始する。

128～142 頁 「総司令官エウリュピアデスの招集に応じて」～「不穏な空気をまとった兵士たちの傍らを」

会議が紛糾しているのは『歴史』の記述どおりである。そこへなぜかマケドニア王アレクサンドロスが出現して、ペルシア艦隊が強大であることを強調する。

142 頁でテミストクレスが証言しているとおり、この下りはギリシア陸軍の最初の防衛線になるはずだったテンペでの出来事(『歴史』巻 7、173 節。『サラミス』では 14 頁で言及されている)の繰り返しである(『歴史』ではテンペでギリシア陣営に赴いたのはマケドニア王自身ではなくその使者)。

なお、同 173 節によれば、テンペに集結したギリシア陸軍のうち、アテナイ部隊の指揮官はテミストクレス、スパルタ部隊の指揮官はエウアイネトスだった(つまりエウリュピアデスはテンペには居合わせなかった)。

マケドニア王アレクサンドロスすなわちアレクサンドロス 1 世(アレクサンドロス大王

は3世)は、ペルシア側についていながらしばしば「ギリシアのためを思って行動し」し、ギリシア側もこれを善意と了解してアレクサンドロスを信頼し、ペルシアはペルシアで彼に対するギリシアの信頼をよく知っており、ギリシアへの使者に立てたりする。巻9、45節ではついに、アレクサンドロス自身が夜中にペルシア軍陣中を抜け出して馬を駆り、ギリシア軍にペルシア軍が翌日合戦を挑むという情報をもたらす(そして再び馬を駆ってペルシア陣営に戻る)。

アレクサンドロスがギリシア軍にもたらす情報は、毎回大して有益だとも思えないものばかりなんだが、そのたびにギリシア軍は右往左往するのであった。

巻5、22節によると、アレクサンドロスがかつてオリュンピア競技に参加しようと望んだ時、他の競技者たちがこれはギリシア人のための競技だと言って彼を除外しようとした。マケドニア歴代の王はギリシア系だという自称に疑いを持つギリシア人は多かったようである。この時はアレクサンドロスは自分の祖がアルゴス人だということを証明し、競技に出場できた。

詳しい系譜については巻8、137節。巻9、45節でも自らがギリシア系であることを強調している。

144頁 「終わったのでしょうか？」

『歴史』巻8、75節ではテμισトクレスは密かに会議を抜け出すことになっているが、『サラミス』ではアレクサンドロス出現のどさくさに紛れて、強引に会議を中断させる。

なお、「分裂と崩壊という二柱の神」といった言い回しは巻8、111節に見られる(ペルシアについていたアンドロス島の住民に金品を要求するテμισトクレスと、拒絶する島民の双方が使っている)。

149頁 「ペルシア人のシキンノスは」

シキンノスがテμισトクレスの家僕で養育係であることは巻8、75節にあるが、出自については記されていない。『歴史』では彼はテμισトクレスによってギリシア北部のテスピアイの市民にしてみらうが、『サラミス』では南イタリアのシリス。

王に跪拝するペルシアの慣習に対するギリシア人の反感については、巻7、136節で述べられている。

シキンノスはクセルクセスの本営に送り込まれる。狭い海峡を隔てて目と鼻の先にあるので、この工作は速やかに行われ、速やかに効力を発揮することになるのだが、それでも何時間かは要する。『歴史』巻8、78節ではその間、「サラミスに在るギリシア軍指揮官たちの間では激しい論争がつづけられていた。」とするのみだが、『サラミス』ではテμισトクレスがあれこれ時間稼ぎをする様子が描かれる。

アルテミシアの生け捕りに1万ドラクマの賞金を出したのはアテナイ人。「アテナイ人としては、一女子の身でアテナイに兵を進めるということに憤懣を禁じ得なかったのである。」(巻8、93節)。

なお、この時のアルテミシアにはすでに青年期に達した息子があった(巻7、99節)。古代ギリシア女性は13、4歳で嫁ぐから、まあ若く見積もれば20代後半くらいってところか。

174頁で言及されているとおり、アテナイ人クレイニ阿斯は個人で軍船と乗員(200人)を所有している(巻8、17節)。

176頁で話題に上る、「テミストクレスがばらまいた石版」については、巻8、22節にある。アルテミシオン海戦が終わって撤退するに当たって、配下に一帯の給水地点を回らせ、石に文言を刻ませた。イオニア艦隊にペルシアからの離反を訴える内容である。

ヘロドトスは、テミストクレスは「両様の意図をもっていたに相違なく、もしこの文言がペルシア王に知られずに済む場合には、イオニア人を離反させて味方に引き入れる効があろうし、またもしクセルクセスに報告されて讒言の具に用いられるようなことがあれば、イオニア人に対する不信感を王に抱かせ、海戦には彼らを加えぬようにさせることができようと考えたのであろう」と推測している。

しかしいずれにせよ巻8、85節にあるように、この石版作戦は空振りに終わったのであった。

182～202頁 「日没の頃」～「ギリシア勢の指揮官諸君」

巻8、76～78節。シキンノスがアテナイ人指揮官(テミストクレス)の密使としてもたらした、ギリシア海軍がサラミス海域から撤退を図っている、という情報を、ペルシア軍は信じた(何しろ事実なのだから当然である)。そこでテミストクレスの勧告どおり、ギリシア艦隊が逃げてくるところを撃とうと、プシュッタレイア島からキュノスラ岬一帯の海域を封鎖した。

こうした動きは密に行われたので、サラミスのギリシア勢はまったく気づかずに激しい論争を続けていたという。一方『サラミス』では、プシュッタレイア島上陸の報は夜にはサラミスにもたらされる。しかし彼らはこの情報の重要性をまったく慮ることなく論争を続けるのである。

203頁 「テミストクレスが天幕から」

巻8、78～82節。ギリシア諸将の論戦中にやってきたアリストイデスは、二年前にアテナイから追放された人物であるが、『歴史』訳注によると、仕組んだのはほかならぬテミス

トクレスだった。

『歴史』ではこの人物の高潔さを讃え、国難に直面してこれまでのいきさつを忘れること
にしてテミストクレスに協力しにやってきた、としている。『サラミス』でのアリスティデ
スは、同じく高潔であり、祖国のためならテミストクレスとの協力も厭わないが、ただし
過去の行き掛かりを捨てる気はないのである。

アリスティデスがサラミスに来た直接の目的は、ギリシア海軍の退路が塞がれたことを
報せるためだった。テミストクレスはアリスティデスに、それは戦う気のない味方を否が
応でもサラミスで戦わせるために自分が行った策であると明かし、しかし自分がこの報せ
を一同に伝えても信じてもらえないに違いないから、あなたの口から伝えてくれ、と依頼
する。

アリスティデスは退路が断たれたことを指揮官たちに伝えたが、大部分の者はそれを信
じず、論戦は続いた。

そこへペルシア側についていたテノス島の軍船一隻が脱走してきて、アリスティデスが
もたらしたのと同じ情報を伝えた。

ここまでは、『サラミス』の展開は『歴史』と同じである。

211～244 頁 「テノスはエーゲ海に浮かぶ島嶼国の一つで」～「アテナイ勢が捕虜を犠牲 に捧げた」

巻8、83 節。テノス島の情勢および彼らの二度にわたる寝返りの理由については、ヘロ
ドトスは何も語っていない。ともかくこのテノス人たちの報告をギリシア勢は信じ、よう
やく海戦の準備にかかる。

準備は夜を徹して行われるが、『サラミス』ではこの準備の様子も詳しく描かれる。

まず、その場でテミストクレスが総司令官エウリュピアデスを差し置いて采配を振るい、
艦隊の配置等を決定する。順を追って『歴史』該当記事の有無、相違などを提示する(いず
れも『歴史』では、テミストクレスによる決定とはしていない)。

コリントスの艦隊は、主戦場から離れた海域にいたようである(94 節)。これについては
後述。

前述のとおり、ペルシア軍は海峡を封鎖しただけでなくプシュッタレイア島に揚陸もし
ていたが、『歴史』ではペルシア軍の狙いを推測して、「海戦となれば兵員や難破物がここ
には特に多数漂流してくるであろうから、味方は救助し敵は撃滅する」というものであろ
うとしている(76 節)。プシュッタレイアを奪還し、逆にギリシア兵を救助しペルシア兵を
撃滅したのは、アリスティデス(上記。テミストクレスの政敵)であった(95 節)。アリスティ
デスのプシュッタレイア島での活躍について、『サラミス』では 226 頁「同じ頃、湾曲した
舷側を持つ吸う堰の漁船が」および 251 頁「焼け焦げた船の残骸の向こうを」の二つの節

で描いている。

アテナイ軍に対してのがフェニキア部隊、スパルタ軍に対してのはイオニア部隊、という配置は 85 節。

アイギナが敗走するペルシア軍を海峡出口で待ち構えて撃破したことは 91 節。

231 頁「東の空が朝の色に染まり」の節で、テミストクレスは士気の鼓舞のため、ペルシア人捕虜を自らの手で犠牲に捧げねばならない羽目に陥る。『歴史』は当時のペルシアに人身供犠の風習があったとあるが(巻 7、114 節および 180 節)、ギリシアも同様であったかどうかの記述はない。

『歴史』巻 8、83 節「夜の白むとともに指揮官たちは艦上戦闘員を集合させたが、この時テミストクレスの与えた訓示は他のどれよりも優れたものであった。その演説は一貫して、人間の本性およびその状況に関連するあらゆる善悪優劣を対比することに終始したもので、最期に彼は両者の内の良き方を選べと諭してその演説を閉じ、乗船の命令を発した。」

『サラミス』238 頁「アテナイ勢が捕虜を犠牲に捧げた」の節では、この時の(テミストクレスのものより優れていない)他の指揮官の演説、そして『歴史』で要約されたとおりの内容のテミストクレスの演説が記される。

他の指揮官たちの演説の中で、『歴史』に該当記事があるものは以下の二つ。

イオニア海軍の練度が低く、その理由は訓練に励む忍耐力を欠いている、とする根拠は前 490 年代にイオニアがペルシアに反乱を起こした際のエピソード(巻 6、12 節)。

ギリシア人は泳げるがペルシア人は泳げない、というのは巻 8、89 節。

ギリシア勢の船の数については巻 8、43～48 節(「アルテミシオンの折と同数」とある、アルテミシオン海戦時の船の数は同 1 節)。アテナイ市民の多くがトロイゼンに避難していたことは 48 節にある。

245 頁 「親愛なるオイバレスへ」

手紙を書いていたのが、クセルクセスの書記の一人であったことが判明。「クセルクセスはサラミス島の正面にあるアイガレオス山の麓(『サラミス』では中腹)に坐り、味方の将士が海戦中手柄を立てるごとに、その人物の名を訊ね、書記がその艦長の名を父称および出身地の町の名とともに記帳していた」(巻 8、90 節)

246 頁 「一人の甲板員が」

旗艦にはそれと判る標識があったことは、92 節にある。

252 頁 「ギリシア諸国の艦隊は」

84 節 . どのように戦端が開かれたのか、三つの説を挙げている。『サラミス』ではこのうちの二つを同時に起こったこととして描き、戦闘の開始としている。『歴史』でギリシア軍の前に一人の女が現れて鼓舞激励(というか挑発)した、というのを神霊による現象でないとするなら、この時海上にいた女といえは当然アルテミシアだということになる。

255 頁 「野太いラッパの音が」

ペルシア軍の戦列が乱れていたことは 86 節、後退しようとする前線の船と前進しようとする後方の船とが衝突して破壊されたことは 89 節。

259 頁 「乾いた風がサラミスの海峡を」

アルテミシアが味方を犠牲にして逃げ延びた下りは 87 節。88 節では、アイガレオス山で観戦していたクセルクセスの側近らがアルテミシアが沈めたのは敵船だと見誤って王に伝えたため、彼女は咎められるどころか却って面目を施すになった、と伝える。

273 頁 「親愛なるオイバレスへ」

クセルクセスの弟アリアビグネスの戦死は 89 節。

クセルクセスがマルドニオスに陸上部隊を残してペルシアへ戻ることを決定(アルテミシアの意見を容れて)し、子供たちをアルテミシアに預けて先に発させたことは 102・103 節。

マルドニオスが討ち死の覚悟をしていたことは 100 節。

275 頁 「朝の光がサラミスの入り江を」

ペルシア海軍はその夜のうちにパレロン港から撤退し(107 節)、翌朝これを知ったギリシア勢は追撃を決定したがアンドロス島まで行ってももはや敵影は発見できなかったので、上陸して議論を始める(108 節)。

『サラミス』では、サラミス島に留まったまま議論が行われたとするが、議論の展開は『歴史』と同じ。テミストクレスはエーゲ海を北上して、ヘレスポントス海峡でクセルクセスの退路を断つことを主張するが、エウリュピアデスと他のペロポネソス諸国の指揮官らに反対され、すぐに諦める。

テミストクレスによるアデイマントス指揮下のコリントス軍への誹謗については『歴史』は伝えていないが、アテナイ人による誹謗が行われたことは 94 節にある。そういうことを積極的に行うアテナイ人といえは、テミストクレスを措いてほかにいないであろう。

109・110 節で述べられている後日談によれば、テミストクレスは血気に逸るアテナイ人達を、退路を断てば追い詰められたペルシア軍は決死の反撃をしかねない、というエウ

リュビアデスらの意見をあたかも自分の意見であるかのように述べて説得した。続いて、忠実な部下(その一人はまたしてもシキンノス)をクセルクセスの許に送り、「アテナイ人テミストクレスはあなたのお役に立ちたいとの念願から、貴国の艦隊を追撃しヘレスポントスの船橋を破壊せんと望むギリシア軍を望むギリシア軍を制止した」ので、「今やお心安くご帰国下さい」と伝えさせた。

もし後日アテナイから亡命する羽目になった時にはペルシア王の許に身を寄せよう、という魂胆で恩を売ったのであった。そして現実には、そうなのである(訳注：十年ほど後にアテナイから追放される。トゥキュティデス巻1)。追放の理由は、『歴史』でも『サラミス』でも続いて述べられているとおり、私腹を肥やしすぎたのである。

279 頁 「サラミスの島から」

111 節によると、アンドロス島で追撃を諦めたギリシア軍は、そのままアンドロス島にペルシア側に加担したことを理由に金品を要求し、拒絶されるとこれを攻囲した。アンドロス島、121 節で述べられているように続いてカリュストス島を攻撃したのは「ギリシア軍」となっているが、111・112 節の記述からするとアテナイ単独の仕業であり、もちろんテミストクレスの発意である。

アンドロス島から金品を巻き上げるのは失敗した。これもまた、実にテミストクレスらしい経緯である。我々は「『説得』と『強制』の二大神を奉じてやってきたのであるから、なんとしても金を払え」というテミストクレスの要求に対し、アンドロス人は、我々は「『貧困』と『不如意』という役にも立たぬ二柱の神がこの島を立ち退かず、いつまでも居座っているのです、この神々を抱えている限り金を払うことはできない。アテナイの力をもってしても、自分たちの国の無力には勝てまい」と答え、包囲攻撃を受けてもとうとう金を払わなかったのであった。

しかしアンドロス島の攻囲と、続くカリュントス島の掠奪に、ペルシアに加担していた島々はすっかり恐れをなした。そしてテミストクレスが使者(またしてもシキンノスら)を送って金銭を要求すると、諾々と従ったのであった。

「このようにテミストクレスはアンドロスを基地とし、他の指揮官には内密で島嶼民から金銭を巻き上げていた」

まあ 142 および 144 節で言及されているように、アテナイは戦費および戦災で深刻な財政難に陥っていたのであるから、私腹を肥やすのだけがテミストクレスの目的ではなく、アテナイの国庫を潤すためであったのだろう。そしてもちろん、私腹も肥やしたのである。

282 頁 「サラミスの海戦の後」

最終節。クセルクセスの撤退については、『歴史』巻 8、113～120 節。クセルクセスが

アテナイから敗退して以来、ようやく安堵して初めて帯を解いた、と伝えられる地は、ヘレスポントスより手前(ヨーロッパ側)のアブデラとする。

海戦での捕獲品の分配と神々への奉納、殊勲者の決定については 121～124 節。投票した指揮官たち全員が自分自身に第一位の票を入れ、テミストクレスに第二位の票を入れたため、第一位の殊勲者は不在、第二位はテミストクレスに決定した、と本当に『歴史』にそう記されている。

翌春、マルドニオスはマケドニア王アレクサンドロスを使者として、アテナイに和平の申し入れを行ったことは巻 8、136 および 140～144 節。アテナイが拒絶したため再び占領されたのは巻 9、1～4 節。この時もアテナイ市民は戦うことなく速やかに避難し、町を明け渡している。

それに対するスパルタの動向は同 6～11 節。

スパルタの出陣に他のペルポネソス諸国も倣い、再びギリシア同盟軍とペルシア軍との戦いとなる(19 節～)。プラタイアの戦いは 25～89 節。マルドニオスが白馬に乗っていたことは 63 節。

ミュカレ海戦は 90～107 節。これをもって『サラミス』はペルシア戦争の終結とする。『歴史』も、残る 15 節(9 頁分)でペルシア王家の内訌とミュカレの後日談を述べて筆を置いている。

始まりから終わりに至るまでの経緯と、その周囲で起こったもろもろの出来事は、ハリカルナッソス出身のヘロドトスによって、その著作『歴史』にすでに詳しく記されている。面白く、また、ためになる本でもあるので興味のある方は読んでおかれるとよいだろう。